

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号

※ 甲 第

号

氏

名

周 蔚延

論 文 題 目

A Study of Identity, Aesthetics and Politics in Sinophone Malaysian Cinema since the 2000's

(2000年以降の華語語系マレーシア映画におけるアイデンティティ、美学、政治)

論文審査担当者

主査 名古屋大学准教授 馬 然

委員 名古屋大学教授 藤木 秀朗

委員 名古屋大学教授 星野 幸代

委員 名古屋大学准教授 小川 翔太

委員 University of Nottingham, Malaysia 准教授

KHOO Gaik Cheng

論文審査の結果の要旨

〔本論文の概要〕

本研究は華語語系研究を理論的フレームワークとして活用し、ディアスポラ研究やアクセントシネマ研究と連携しながら、マレーシアの社会的・歴史的・政治的な文脈と関連し、2000年以降に制作された現代華語語系マレーシア映画を考察する。

序章と終章を除き、本研究は五つの章によって構成されている。第一章では、「中国性」(Chineseness)というフレーミングを用い、華語語系マレーシア映画監督/作家周青元(チウ・ケン・グアン Chiu Keng Guan)の映画製作戦略について調査し、Chiuが如何にローカルの華語語系の観客とかわかり、華語語系の観客に彼の映画を鑑賞するように促しているのかを考察する。テキスト分析を通し、本章は周(チウ Chiu)の映画がどのように多文化主義の神話及び「想像の国家」としての調和的な民族関係という見方の正体を暴露していることに注目している。第二章では、マレー語の映画を制作する華語語系マレーシア映画監督と華語語系映画を制作するマレー人映画監督の間の相互関係を、三つのケーススタディを通して分析する。第三章では、台湾を拠点とする華語語系マレーシア映画作家廖克发(ラウ・ケウ・ハット Lau Kek Huat)に焦点を当て、彼の三部作 *Absent Without Leave* (2016), *The Tree Remembers* (2019) 及び *Boluomi* (2019)をめぐってテキスト分析を行う。これらの映画を通し、廖(ラウ Lau)は禁じられたマレー共産党(MCP)や、人種暴動、少数民族、マレー人に与えられた特権などの問題について探求している。第四章で、本研究は女性の視点と美学から、マレーシアのインディペンデント映画制作産業の先駆者の一人である映画作家陈翠梅(タン・チュイ・ムイ Tan Chui Mui)の作品『愛は一切に勝つ』*Love Conquers All* (2006)と *Letters from the South* (2013)をポストモダン・マレーシアの社会政治的・歴史的・経済的な文脈と関連付けて考察する。最後に、第五章では、コスモポリタニズムを研究のフレーミングにしなが、二人の華語語系マレーシア映画監督杨毅恒(エドモンド・ヨウ Yeo Edmund)及び黄明志(Namewee)をつながって考察を行う。

全体として、本論文は、アイデンティティとディアスポラ研究の分析的な視点から華語語系マレーシア映画に焦点を当てている。とりわけ、美学的・政治的な意義と関連し、現代華語語系マレーシア映画の発展を明らかにしている。本研究は、まず華語語系マレーシア映画を、華語語系映画研究及びトランスナショナル映画を再考するための最も重要な分野の一つとして前景化している。さらに、華語語系マレーシア映画を、現代マレーシアの社会的・政治的・文化的・経済的領域及び民族・人種間のテンションと不満を理解するための重要な入口として前景化しているともいえる。

〔本論文の評価〕

ポストコロニアル研究、ディアスポラ研究及びエスニック/マイノリティ研究の接点において、華語語系研究は、既存の中国語映画研究、ディアスポラ映画、トランスナ

論文審査の結果の要旨

シヨナル映画の分析枠組みを再構築するための最先端の分野の一つとして考えられる。本論分は、^{サイノフオン}華語語系研究のフレームワーク、特に^{サイノフオン}華語語系映画研究のフレームワークを用いており、以下二つの側面から上記の分野に貢献できると考えられる。

1、マレーシアは東南アジア最大のシナ語派映画制作国の一つである。特に、2000年代に入ると、デジタル映画制作技術の導入や、メディアと映画産業を地域化・グローバル化されるネットワークに統合するというマレーシアの国策によって、マレーシア国内外での映画制作の創造性とダイナミクスが、世界的な注目を浴びている一方、それに対する研究はまだ不足していると考えられる。Sarahの論文は、商業映画とインディペンデント映画両方を取り上げ、独自の批判的な視点から作品を綿密に分析した上、マレーシアにおける^{サイノフオン}華語語系映画制作の全貌を明らかにしている。

さらに、著者の多言語能力は、方言やアクセントの異なる^{サイノフオン}華語語系映画だけでなく、クレオール化された文化的なテキストをも幅広く分析することを可能にしている。

2、著者は慎重な分析を行い、^{サイノフオン}華語語系マレーシア映画を^{サイノフオン}華語語系映画と視覚文化の論争の入口として捉え、とりわけ、^{サイノフオン}華語語系マレーシア映画を通し、作家研究、アイデンティティ・ポリティックス、ディアスポラ研究及び中国語映画の相互関係を再考するという深刻な見解を提示している。本研究は、グローバル時代におけるマレーシア映画独自の多様な可能性だけでなく、^{サイノフオン}華語語系マレーシア映画監督の位置づけが如何にアジア間の映画制作を全体として捉えることに貢献しているのかに対する再考をも促している。

一方で、この論文はいくつかの面で改善できると考えられる。例えば、多言語の名称や言語が混在している故に、著者は音訳などの技術的な面にさらに注意を払うべきである。また、もっと重要なことは、本論文で、多様な理論的フレーミングを用いながら、徹底的な議論を行っているにもかかわらず、著者はこれらのフレーミングを自分のテキスト分析に十分に統合していない場合もある。さらに、新型コロナウイルス感染症の故に、著者がより集中的なフィールドワークを行う機会がないことは理解できるが、もしそのような機会が与えられていれば、論文全体がより良いサポートと確証を受けられた可能性があることも事実である。とはいえ、こうした問題は今後の課題として十分に克服していくことが期待できるものであり、本論文の価値を損なうものではない。

以上により、審査委員一同、本論文が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと判断した。